雑題

夜川百首 全

911.1
7

[illegible]

藤川百首

以巻頭歌為題號和漢典籍此例多或號四文字題百首或號難題百首宗碩抄云此百首を結題百首と号ス結題とハ題一ツ乃中ニ二事ツゝ合せられハなり

蒐清玉不破関 府関也 よ不破関と云あり此所を今の世ニ関ヶ原と云此所西方関の藤川と云あり日本にて三関と云ハ相坂と鈴鹿 名関 と不破とあり皆名高き所なり

道長 御堂関白

長家 六男号御子左家 又号三条 母高明公女

忠家 大納言正二位

俊忠 卿中納言従三位 号二条

俊成 四男家督、号五条正三位又御子左、寺号慈雲寺、道号花渓、法名釈阿。

定家 二男家督 号京極又冷泉又二条又一条正二位中納言民部卿 母若狭守親忠女而号美福門院女房伯耆 寺号花光寺、道号以清、法名明静、仁治二年八月二日薨八十歳

此百首相傳之次第

定家 — 為家 号中院亜相 法名融覚 中院ハ嵯峨ニアリ — 為世

頓阿 為世ノ弟子系図小野宮大納言能実之六代目也初諱泰尋遁世而感空又改頓阿 後醍醐天皇之時代也 — 経賢 法印

尭尊 大僧都 — 尭孝 法印 — 尭憲 実又清水谷公和二男也為尭孝之養子

尭孝 — 尭恵 尭孝弟子 法印 藤坊改雲松院 — 高井大膳大夫 尭恵弟子 相州小田原住

一華堂乗阿 甲州武田信虎子 — 切臨 一華弟子

二條家冷泉家両家相傳次第

尭孝 小野宮大納言能実九代孫 — 常縁 法名尭傳 東下野守 — 常和 法名素安

大納言
号下冷泉
持為──従五位参河守
木戸
孝範
持為弟子──女
正吉母

俗名大膳大夫義実 伊豆守志朝
木戸
正吉
常和弟子──木戸
賢哲──木戸
休波
元齊

正吉ノ藤川百首抄ニ弘治三年七月廿八日トアリ弘治三年ヨリ慶安二年ヿ五十三年也

関路早春　春二十首

拾遺集に三春とよめるハ正二三月を云立春といふハ正月の節分をいふなり初春と云ハ元日より三十日乃間を云但哥によみハ元日をよめる多し六帖をよ先年もあり

初春　金葉集ニ立春の次ニ入　前斎宮内侍
春の来る夜のまの風のいかなれハ今朝吹風ハ氷とくらん

初春　後撰集巻首ニ入　紀友則
水のおもにあや吹みだる春風や池の氷を今日はとくらん

早春と云ハ元日より六日までなりこれハ元日をよめる哥多し六日より後乃事をハよまん撰集にも初春早春と次第あり風雅集にハ早春の巻

りえ白きききき　初音乃莟に六日後のるをとりみく
早春初音と深申して入り
後拾遺　関路早春　初音乃沢にへこされた　ちいえかのみありて　後宇多院
あふさかの木綿付鳥の音さへ小あしゆ今こそ春ハ来まけり
たのミこし関乃藤川まさてしふうき瀬ふ下もせむいり、ま
藤川と濁る之駿河の冨士川ハすみてよむなり
文字の心ハ藤川西白き名所香ハえんと多のこし
なりされともかさみ深くて又いりぬるにや春来てもと
いふ春ありても世にいはいハ川本の流やまし也
裏説云世間の万事ハよ濁るきい清あるが有為の
境界なるとよめりす善を修せんとすれハ天魔
乃障碍ある之花よ雨風月よ雲霧の障処あり故よ

佛者ハ苦楽を離き善悪をえ行うて極楽とし
浄不浄のなりゐを浄もとす只自然乃道理を離
して世間ハ心を炊いさぬと本心を奏とすられと
古言よハ大日の位とん
大部の光民ハ長々く優見神をあらす実に大安
乃君ヨれとし又根本天地万物の源し善悪を
まつれ在ゐる向もして万物を造化して四時の中
りくとまハ温和なる国素也　拾遺集光臥ヨ壬生
忠岑か哥に
春たつといふまかりやミよ野の山も霞てけさハ見ゆらん
又の哥不破の中山霞消て見わ乃筝の夜川
或説云古今集二十巻大統所の哥よ

又の宣旨の廣川絶えして君は流され給へん万代までに
此哥絶えして君は流され給へとあるを抄こしとなり
勅なりにあひ宮仕を万代までよせて八十六代四條
院の文暦元年に七十三歳にて出家の身となりし
を述懐の哥なりとも下もさむよ涯をめくらせより老氏
に述懐乃哥いひくるれとも毛詩に怨者其吟悲
と云ことし言よある古詞にあらはれさりける聖人の
一首にいと誤なきに言ひける志なるに定家の一事の誤
をもつて後の若を益なくは仁道に非也昔政は恐
於虎なりと おかしより言おきつなるへしとよ見也
世のさかしき世間相常説をおかりへは有んと答は非
まし知へし百人一首述懐を有心体の本として王

道述懐の哥と云ふ乃数なるへし定家卿は末世の哥
花のみにして實のなしと常にいひしとなり
心敬云撰集ることの老民は大やうに長高く幽玄なるを用ひ百首
五十首以下の老民は時よりけりよると見えて一方ならす定家
百首老民乃哥に意あるといへる福あり文女所入内の屏風乃中よりも
当時きらふへき哥ありけ居理は至まる人なれとは分別ある人のみ知云云
右の古今集の哥を出して後々の證りは廣川に
朝家に宜をすゝめり　新千載九釈教部題不知法印雲禅
教へをぬ舛の廣川濟舟の法の為りや世に流され給ふまし
今の世に於る川に而ある種の事なりし昔は法こそ
有ける佛法をすゝめ朝家へ宮仕する心の意や
或説云読閑の中に閑廣川と云まといひし又文字
乃詞なと定あるへし英保の任國を望まれは
勅許なき故述懐の哥也縣召乃除目とく正月十一日

より十三月まて　三ケ月　任外官也遙に始られとして下
国なくれハ夜川の京官尺如るすと深き底まとゐり
定考會と書てかうてう恵とよむハ名月なり八月
十二月なり司召とて京官除目と云也
縣召ハ近国ハ一任四ケ年又陸奥九州なとハ一任
五ケ年まて六ケ年に上洛也
あさきてひるたにみとせ年をへて都のみふりこすれなり
詞花集の小序云大納言經信右宰帥にて下るる
に川尻に海うりてあひくらかんは
六とせそ居いき海さん任右のつかへをつとめしくもなき

湖上朝霞

あさわたる浦のみ渚乃八重霞えやハ吹とく志賀の浦風

朝朗と書也かすみをよんハ朝ハ湖とよふなり又
鈍みをあさひらきと詠るり義ハはかり八の字七乃
字ハ数とふ保也八百万神八咫鏡八尺瓊神璽とハ
八坂瓊汁統と云なり口の白ハ不可得而吹解となり
海松和布ハ湖によるきものや故に凡ぬめ渚といへり
万葉の哥に
凡海のよしをとにの海にかくりしの吹るさすさめ志賀浦風
秋風ハあさ霞をそかひらり吉風らむ吉霞わ
吉風を和して霞を吹らもさめしよあり　此哥にて
えやハ吹とくとや霞に隔られて面白景乱凡は
月もなきてなり　湖光といへるとにの海なり
正吉云霞ハ湯気なれハ立と云吉ハ陰音なれハ隔と云

私云常之かゝる常之のかゝる名に立て胡ようすくよめり

霞隔遠樹

三輪の山先里ゝすむもの川いふあひさん二本との杉
遠乃字の心ハ三輪と泊瀬と隔る所をいひお
きり三輪より先ゝ霞さる意なり又義ハ三輪ゝ待里
といひ君ハきり住吉と三輪と夫婦の契ある所の
歌よ古今集に
住吉の岸も女せさらんものゆへよいさくし人に待とつられん
泊瀬川古河の辺よ二本ある杉年をへて又もあひ見ん二本ある杉
霞隔つ君ハ故ふ又も逢見んてあきらもいるかあ
ふんとよめり

古今
三輪山をしかもかくすか春霞人に知れぬ花や咲らん 貫之

里人ハ今霞にゆくふ三輪川の清き流よ歌をゆらしも

羈中聞鶯 羈ノ字ハ遠キ旅ヲ云

又やこ出るハ出山をめはりて衣かくきもりうへ谷乃かくひとく
歌とハ古御なり連旅よ歌も旅の旬故郷も旅ゆれハ
折を旅之折なりてハ二句去なり只の歌よ旅乃
故郷ハ厭をきらふなり此心ハよくる者ハ旅をいて
春日とす詩ゝも古園を歌の中とす春山鶯とは
山行の見なり出し始まそに用足假衣なり特衣
うそハなし鶯をきゝて旅のうさを延和よ鶯
はとこ谷ハ上乃山の字よよせあり歌よをさうして
便なき深山幽谷乃友と鶯をおもふハあはれなし
おりしろくもあるへし

元良親王

あふさハ壺山名所なり衣きてハ人わきまへぬものゝ
山名ハ尾上を海ぬるなりきてとハ夜の縁之字てし
色ぬるしのかやうを本かとする山名を山摺とし
をあらはすなるなり　壺山を摺ある衣といふ詞
もや梅の枝の一入摺の小忌衣山藍よ摺ときおと
衣君がふの摺衣紫の摺ありの衣とハ色よしにを云ぬ
萩りて摺きる衣萩の花ずりなとも云歟

羇玉篇云羇猗切羇也縷革也又古文ノ羇ノ字絡頭也　支韻ノ平ニ然
門ニ羇寄也云ミ和玉云旅也羇客ト云字ハ只旅客ノ羇万葉ノ四巻ニ
旅ト訓ス文ノ韻當門ニ馬絆ト註スヲモカヒラモツヲ也文字ノ方ニハ遠キ旅ノ
心ニ用ユ羇字ト云字アリホダリシタル旅客也　後柏原院御製羇中ニ懐都
宿コトノ一夜ノ友モ過コシハ皆古郷ノ人ニコヒシキ　又古今集九羇旅　惟喬親王
ノ倅ニ狩ニマカリケル時ニ天ノ川ト云所ノ川ノホトリニテ　狩クラシ七夕ツメニ宿カラン
天ノ川原ニ我ハ来ニケリ　業平　朱雀院ノ奈良ニオハシマシタリケル時ニ手向山ニテ

此タビハヌサモトリアヘズ手向山モミヂノニシキ神ノマニマニ　菅家
旅ト云題目ハナシ皆羇旅トアリ遠キモ近キモ旅ノ心ヲ　羇旅ニハタゝ

隣家ノ竹鶯

山城の国生ふちかく卿なれてけり竹かれにいとふかくしまと
古今詠諸歌よ見不知詠人不知の哥に
梅の花みにこそきつれ鶯のひとくひとくといとひしもをる
後撰　竹ちかく夜床寝ハせじ鶯のなく声きけハ朝いせられず
一首ともよめり哥隣を云きよれしと隣ハ人来と
哥にて也我竹白見とハ竹のまハ山城なる小鶯の我
か竹の中に来て逝くとハ隣のことをいひたり下意ハ
賓師乃住ふてその檐よ訪ひしぬる人ならぬ貫宿
の人の国ならぬハ人の行ひ不義なるまう我云を戒めり

其家に在ては其たま丈をもし　跡しずかなり必その家
に災来りや又義営とは人に比して老その末々をいふと
歟ともいへり　清少納言の枕双紙小営の根なる歟よくし
とにかくの称々の胡乃とびな給ふとあり　源氏物語
に営の菓子ちらし松とあり　松に葉みてもあり　詩
に日く霞床は梅竹なり桜をひきて霞床とは
せぬとあり

田邊若菜（ワカナ）

小山田の水のこゝろあせ清らし緑にとる色たすくれき
畔（アセ）をあなしゆかれは不氷（ヲ）とも氷のところ残し
よる畔乃若菜は氷乃清ぬ時分なれと色もとを
くすなれとも時節の大事称を正直（セツスク）にありとあり

野外残雪（ノコシ）

春日野はきのふれ雪の消えてにふりきぬ（雪）袖乃数ふる
気のかれ字は深くのやんごとなき跡もなくや残雪
とは去年の除袋くるる消残て春まてあるをいふ此
方は冬乃雪跡て春に除き去られて残る雪なと二
俤とも小用なり

古今　拾撰叙注
春日野の若菜摘にやる白妙の袖ふりはへて人のゆくらん
白妙はまこ叙の春日野にいとおかしくたはむれてこそん
消ぞは消るにしや出ると云詞を見るも出ゆくも
役なり　ふりてへとは跡てしふ字なり又雪の縁ある
詞なり源氏物語にゆくての御事さへあるふふりきえ
させあふとありけりてとは次（ワイテ）かり事の次てよ由け

なりたるゆゑにかくはいへるなり此ゆへとしゆんなり作之
ハ此の意ハ雁のなくに袖を打払ひて出行数々を
かり或説に云ハ昨日降りし清ぐくれど今日君来
を摘までかへれハ黒日かれハ袖に出の袖乃数
多ふるや是ハ本哥にかゝりたる義也

山路梅花

名もしるしてハこゝへ梅花のゆふにきへ乃あきしかの山
古今
梅も白ふ雪へハくもる山中に出れしかしるき
見ゆるて梅にうへたる梅もしるとも香を
此二首の本哥を以てすべからのくるき暗よ時分てもあ
ま山路にある人よかくどれ人よいあしきこへ乃白を
情ありて見るをいけきまへらんなりしやえ

乃べの字ハ升の暗とは雪ハあきかめ為て秋
ハ夕をかるとすゆふに同し本哥乃暗部山ハ鞍馬山
乃一名なり暗き方にもハ清といふ夕の物そく
らふ方もよ本哥ハ詞くいふなり
拾遺
見かる香よくらふの山の時鳥いつもあかれぬ歎きとらん
新古今
くらぶ山木の下陰の見つしそれの光やえるらな

梅薫夜風

白山る枕に雪に梅の香よくしき夜の星や出らん
音の間る風ゆる西そうりにて有ゆが梅の香の
枕よてき裡ゆハ暗天よなりて見ゆもかくやう
らんとや梅のきき梅の香ふ風をこゝへ入るゝよく
遠因侍正の哥に

此月や〻絶きぬすのうらねよも梅乃袖よ添しむ
此香も風のふあり但し梅なり夜梅もの白さを
早ふ喩へたる古語ハ此句りて用之只早やむへく
殺のみすれど梅をなり

水邊古柳

年月とふりにふりれ柳のをみゆく川乃水の世乃なる
伊勢物語よみゆく川乃なかれて柳を八りをを
ふ云 同所の何よ木の陰にとり居てかきいひい
りとあり此木乃陰を柳とみなるとハ昔より
八橋よハ別の木とよまん故り柳ふ定しし葉
年の時より定家の今さりもまて年月のふりり
にけりなと云句ふ古柳とハ此しかり水沼ハとすれ

ハ之河は八橋となり前の川とすれハ何よなる
玉りつら老よ前ゆく川とふん酒衡いと云下ふハ正吉
乃云二句ハ歳月の帰らすそて驚んと何事と未
世よハ衰よ柳ハ為りへりたるし 盛衰ハ世間事柄の
相なるを観せり余情限なし 異説多し不用

雨中清花

本ハ八橋よ縁の糸とくりかけてくもてよまふ古柳かれ 後拾

ふまりや木のめも春の梅もあやのいさ哀乃春雨もなり
今日とは雨の降る日とさすなりて白いかくちのも乃
歎のいさ哀しうと称いとりふ古今の詞なりかり
花遊ていさめしよ 迷ぞ花なといさめし

花之雨 養得自為花父母 洗来寧辨葉君臣

雨ハ叡のいさめの中に花をさそふらんやこのめし
春をまれ月乃ちる方にまかせんノ

野花留人ヲ

花咲きけるうき世忘て咲てハちりぬれ散らぬハ無世も我への（ゆかり）人
玉きはるニ義あり一つには玉は褒美詞この時は荘厳きえ
まりや極の字を中略してきはまると云之一つには魂極也
此哥にては花の命きはまる處とすべしけるとする花
乃ちらずは恩ふとちはしく千世も我へよろこさんと跡
花を賞して云り限りあるはいのちも千世ものゝんと之
古今集に素性法師の哥に
いつまでか野べに心のあくかれん花しちらすは千世もへぬへし
これハ素性法師一人の身によせり黄門乃此哥ハ諸人
乃命のびんとよめり玉きはるとは清白きはまる哥
によめる之千世ものへ乃諸人に花の留人のこゝろあり人の
命を留るとよめり　玉極(タマキハル)内(ウチ)の大野ハ平らかにてとよ
める哥は荘厳乃極まる内裏(ダイリ)といふ事之 異説多不用

遠望山花

色ならふましのさやゆかしらん此花さくれ吉野の山乃端
二の句作者の粉骨也花を惑く思ふる事中
よ涙しのさしとゆしる見とやまてものさやゆかしらん
といふ詞よ是れ字数少なくより妙なり去山しそさ
と花と雲とを見わきぬと之　又説に古今集假名序に
秋乃ゆふへ立田川に流るゝもみちをは帝の御目に錦
と見給ひ春の朝吉野山のさくらハ人丸か心にハ雲

かくのごとくわけ侍るといふ　常にハ花を言ふにみえたれとも
此句作意ハいはれたり花見れてのち実の言も
侍らふ有んと之下の人ハ君子多則ハ小人陰小
人登則ハ君子光を隠すとかくも我見へり

暁庭落花

あかれくのをのかきぬし咲風に苔乃みとりもちをつゝく
古今ニシノヽメ凌晨乃朗ホガラくと明けゆくをのかきぬおのれく使しき
をのかきぬし蒸汲草ニ云ッ暁といふん己オノレといふ
よはあらん暁の別をきぬしと云ぬ苔の縁に庭と
いふ字をとりなり　正若云詞ハ旧フルク情コヽロハ新しといふ
ハ此句もて見べし　先苔の上に吹ちらしたる花を文
風のふけばうことも別乃所へ吹ゆき紛に花ハ袖なり

結句ハ花まてつゝくなりおのかきぬくにのちらる乃事
なり　我明方之空の暁の字をこめたり　他説多不用

故郷夕花

里ハあれぬ庭の桜ハふりにてたとられ時をとふ人もなし
荒果ぬなり　上句ハ時節のうつりかはりたるなり
さくらも古木に成て見る人も邪し　けふ人来て
もをとふよあれて誰みとこそとふもる人もなしとふ
誰彼時とハ昔と我との境ひ之あれハくれ時とも
なり　結句のもおしと云詞にちらしあり荒小
里に昔忘れぬ古木乃花の夕栄乃露ふりき時を
とも人とりぬいもんやそてれ時も同人なしといひ
残しけり　他説有不用

河上春月

ゆく末のかれてもきえぬみなの川みさへ渕となる月影

筑波根の峯よりおつるみなの川恋ぞつもりて渕となりぬる　陽成院御歌

常陸國乃名所也末の始の歌の詞をとりてふかく立
よる波のすゑの渕といへり其比の月かけてみゆる
物なり月乃流れハ曉月なり春の流るとハ暮
春之春の暮ゆくの早きに川乃流を添ふ末ハ
なく見れハ猶く春乃おしくてハかすかにある月
なりしなりと云〻

新拾　菟奈の川みなきれて瀬々にたつ浪ハ嵐より落る木葉なりけれ　浩嬉

夫木三月尽　今日くれぬいつくへ春のゆきて又仲ふ紅を花に見すらん

夫木春雲　春雨も暮る今日をハ惜むなりいつくへゆくにかにみえらん

春乃深き由なり　異説アリ不用

河邊菊花

大井川かきつの浪の花の色残るくきつの岸の白菊

埭ハ以土遏水也　堰ハ壅水也　かきつとハ杙をうちて柴垣
をし水をとゞむるをいふ　大井川ハ嵐山乃下の川也
葛野郡なり　浪の花ハ波之似たる物之浪の花を初
ハ面白きものにおもひ侍るに波にその菊にうつりて
かく波の花ハ見えん移ろふをうつろふる菊なり
移るとなり　正吉云　浪花ハ白之菊のうつろふハ紅色
也となる程よりうつろひく白色を移ろふとし成
ハ常也　埭異説あり不用　玉云　埭ハ徒賚切　以土遏水
｜ハ盡也　遏ハ壁間隙也　又擁ハ｜也　擁ハ抱也

獨惜暮秋

又ひとのいふなれし草木くたちかくいかしき秋の別を
二乃句ハ獨の字を云草木くたとハ人の事あれくハ
いよしなり 結句暮秋之源氏物語松風巻ニ
前栽なのかを伏さるなど待くろけせぬ寝覚し
この立石なども路まろびふせてあるを情ありて志れさ
ばかりかゝぬべき変るみかゝる處をいさゝばくろ
娘も愛なさきつきありさてむしろて福ハ立所ね
うへんとまる紀りり紀などきゝのるなり
あいせくと云、此句のふを面くいふ草木を分別く
いたしきとよめり 上の前栽とハ延喜十六乃皇子
兼明親王の旧跡大井里にあるを以てこ云源氏
君乃ん詞之源氏ニ前播ノ守隠居して明石の入道と
いふ娘を明石の上といふ源氏の君允近乃間のむなしく人
かく有しを帰路の後ニ源入ニ申りむかふ都のすみか
ひ例あぬてらやとをお思して入道の先祖兼明親王の
旧跡乃大井の宿へうつる時ニ源氏より大井乃古跡
けくろりもふときの詞之尾ろそ数へむそくんとおかし
めそんより 継和よつくろいをまふなり

深夜帰雁

春の雁は八声の鳥もなきぬるまに其の声は丁のいろにきこゆる
るのなりぬ習ふ沈秋の二字あり上句と下句の間に付
廣と云ての字迄へ家口傳あり帰る雁をかへる意之
人方のむりのこけき声は日本に云つんなく花はちりなん
此奇絶の字なくて留まりけ数之古来口傳とも

落花随風に

雲かきはしおもみなひらひらとしらんかたにかる花の末とこそ尋ねて
まつ風の吹きたへ花のちらひ花のちらひ散してまよひて
かふりてかるゝいたまよりまかる花なり又落花と云
ゆへに松風とんに伝きて吹きと飛しと云ことに古云ちり
そのことの字にたきへさせて覚と尽せりかへて見ゑてかし

うつろひし色にそすめる山吹のちるみれ下ゆく山の河瀬

舟中ノ暮春

るハ我らすゝと志のゝ友舟と春雨さらひといへれすれ那（のイ　於道遊卿）
舟にて春の名残をしむ心春の暮とは春のかぎり
なりといへる心也きはきはに友の舟あるや一説云
いへるはいとゝ春すくるなる境を春くれど暮春きは
まりぬるなり正吾の舟よハ友舟のこゝあり春にこそ
いわるゝも也せめて友舟を漕わかれゆくとそ　異説多シ

てうくふんなり此哥ハ又作めて哀きしひくるや

楷亀銘名

はし栓多よ出なりけるのき紙いこそやはかふきしの山ふき　素性法師

本哥古今十九誹諧哥不知

山吹の花色衣ぬしや誰とへど答へずくちなしにして

古今哥ハ山吹乃花をさしてくちなし色といふ心也山吹を

梔のみにたとへてもいはぬを耗するなり

楷州西生郡長柄楷の故事ニ基善と云男人在を

そこしバ付楷ヌ鮑きんといひされど基善を柱まて

らまてくり其娘ハ河内国へ嫁しけれどもものいはぬ故よ

親の方へかへされ時よ雉の啼と伴の人け放されハ娘の哥

ものいへバ父ハ長柄のもし柱なかくハ雉もいられざらまし

本哥ハ山梔子色れ山吹なれバいはで色ふくくあり

下の心よりいはぬをよしとす十参よも口あり

赤詣綺語悪口両舌

かなれしの色にそすめる山吹の花のさかりに下ゆく水の

舟中ノ暮春　　のイ　秋道遐卿

ふかねかすみを春のくれ友舟とまれさしひとつれすりわ

舟まて春の紙さしふる色春の境とは春のかきり

なりけりまるうかりきせすに付友の舟のとやも一説云

けるまでいはりすりのる境をまくれど暮春きハ

まうくなり正吉の舟よハ友舟のとあり春にこそ

けるくらや世めて友舟を漕よるれうとな之異説多シ

卯花隠路 夏十首

拾遺雑廿二

卯花の枝もたわゝの露を見てよミける也人のむすひしかけかへりハ
枝もたわゝにはたわむ様と云ことを云詞
ハ枝と枝との間の遠く妙なる義なり 同之正存
云卯花の枝のたハミて咲しみえぬと之昔ハ我宿
をとりまく人も有しや今ハ卯花咲る宿の折昔に
似ぬとや卯花の露の面白き秋見ゆると云本哥に
折て見ハ落そしぬへき秋萩の枝もたわゝにおける白露

千載三夏卯花
玉川と音にきゝしハ卯花を露のかされる名にこそ有けれ
堯定云此哥異説多し不用之これハ伊勢物語に
惟喬(コレタカノミコ)親王を業平訪よ小野の御室(ミムロ)に参り雪踏分
て君を見んとハとよみける其意乃めくみ外も又

あけほのゝ露と見ゆる小滴をこめたり同し様しく人の業平

拾撰四秋遺三モ入
時まちてふれぬ卯花の色とてこゝ海まても垣根もたえす小咲る卯花

初聞郭公

昨日こそかたらひ立しハ郭公文くちらふく去年乃古声
一乃句よ初の字こそ見立し也古声の古の字初
と云題よ妙なり正存云古哥の初と似たるあり

古今
昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよきて秋風の吹
五月待山郭公うちはふき今もなかなん去年の古声
しさらまふきハ時を得たる負也今もなかなんとは下
知の辞之趣哥の作者ハ当時のうつりかとの来紀
をたて給へり

山家時鳥

此里ハまちし海とまきし都出山といひこゆるたよりすぐれたる
此里とハ所ハ山家なれバ山懐ニ有りてくらしも時有
なけるなり
万葉
夕暮ハ山といひこし里なれや袖さへ月をもらし清く 八九

池朗菖蒲

あくるより今日ひくあやめ池なる水をのかぬ月を引てけふ
今日ひくとハ五月五日なり　そのかミハ菖蒲をさす也
引はる池水を離れて菖蒲之奥州よりてハ五月五日ニ
かつミ葺フキとて志ゞ菰コモりて屋をふくなり
又ちの水海水泥乃花かつミ見る人ニ恋やわたらん
正吾云かくよみしれども花ハさらぬ草之見え恋といふ也
云て

ぎしはらし海未の泥乃草も名も知らぬきこえにハむすび

閑居蚊遣カヤリ　愚按ニハ蚊火トアリ

こがらして煙も見えし時志らぬ竹のそのやどりの
竹ハ世を遁れし人よ縁あり　竹林ニ七乃賢き人と
よあり又山林の境りなるべく若竹もしらるり端
山を淋しき山なり　時志らぬ竹のそこ山の奥なれハ
燻コカルらしても蚊をの煙とは見えまじき蚊を在夏
のおられと常住不変の竹乃その山なれども有り
時志らぬ山を富士の根といひそかのこまでに言ひ給ふ

宗碩云此家乃格なり

盧橘ハナタチバナ驚スヽ夏ヲ

袖の香を花たちばなに残しても沼く跡西ゆ光乃西家

橘のかにさめて後もはかなし人乃袖の香は
けふもしるく橘小殘まどし後にみし人のたもとを
は何とも留ましぬとこ之　絶句の詩に盧橘花開テ
楓葉衰フの諸説に盧橘即枇杷也とこと又詩学大
成乃枇杷の部に盧橘あるあり　文選に盧橘夏熟と
よみたり是らには橘の花咲とおもしろいへど此の間
に秋とあり枇の衰ふとこそ橘を常世より移来る
されど昔を忍ぶとあり藻塩草にとこそ世物この
橘とあり

日本記云（神武ヨリ四十二代文武天皇ノ記）十一代垂仁天皇九年辛酉春二月庚
子朔天皇命田道間守遣常世国令求非時香果今
謂橘是也　十九年秋七月朔天皇崩明年春三月田道間守
至自常世乃至　常世ノ国神仙秘区俗非所臻是以往
来之間経十年乃至　田道間守三宅連之始祖也

森　五月雨

俗人のわきまへおもしや五月雨乃雨にむしては衣手ぬれしを
山城の石瀬乃衣手の杜なり日頃ふる五月雨ぬれ
京にはかふこれぞ俗人乃衣の袖にかゝりし雨なりし
をあしくは此森乃歌よるとしや　異説不用

野ノ夕夏草

あさしほのたちやう下葉たりてあしたに乱れめくる草を待らん
化野（アダシ）をと名所に用ゆ国未考とあり常ならぬ人を
葬る所の名に用ゆるなり三句の句は思ひおち
捨られ田へ入り又それぞめかりしの詞を借てよめり

よしれけるは世に第一の名をうけて涼しく見ゆる夕立の元
此録も世ハ録之文第茂く理の様をもいへり月村所云
在りせハ邪も世ハ月に似之道様ハ是道色とも書之
八雲の雑記云庭様山様宿様なとありお前のことハ
夏の日盛り草木の照りまさくされなとも詠るは
夕立ハ殊の外いとものすに加ふ其ことくに蛍ハ
誰かあらわがおに夏の日のよりくもる蛍を詠る
世とより照りされしも見てあしと見へてる色の
蛍之一首の余情と言ことと以く夏の季に用ゆ
連哥ハ蛍の影と也しても形よりなる文君宮
乃布留野の小萤としもあり正古云刈萱の事ハ
影ハ秋之刈萱乃秋と待ハ誰ハ居がとあかるる之

影なく浅茅か原に刈萱のなひくにも秋の届
此等の證哥多し

澗底蛍火

日影見えて咲てしく数々も白露そ石に結てみえなりける
光なる紀に谷ハ書しと石かけに咲くそくちあるも也
此本哥ハ花乃色の光なる紀ハ日の色くにもちくの谷
も今ハ蛍の光と成るとく

行路夕立

夕立を袖もしほらぬ衣つりもゆかうきてこの元
袖もしほらぬとはぬるく候之候衣なり如之歩行こ
と云とかり行哉なり絶のかな字ハ二つ也　一行
あかり文字ハ哉也

初秋朝風　秋二十首（大）

秋きぬといふばかりなる蓬生に朝との風の色かはりけり

蓬生とは秋は露しげき所より早く立之事は蓬なる所よりは先立なり

春きぬといふばかりにやみよしのゝ山も霞てけさは見ゆらん　忠岑

正右云撰集乃巻頭よこれは並入れし吉野山の春立といふよりに霞こそ是忠岑の詞を借てよみけり秋の来る事験（シルシ）見えぬ事風を知る事を本より露しげき所と師云秋きぬと詠人はいへとしかしまたおもふる我心にはかはりて風を早秋とするとなり

異説多不用

閏月七夕

きの風乃何かりよ
すく之まハ盛なる
く心も居てけさハ孟ん　右参
ハれし吉野山の春立
つ行の詞を作てよ
右知るを其暮り
御人へいへとしまれた

天河夕月ハ名のミかはりて星の名やよめらん
夕月ハ七月の異名なりその夜ハ七夕の名をも
天夜なり上旬ニ沉月なれバ後の夕月よハ七
夕の色とりきなりしとや

野亭夕萩　亭臺 唐音ハチン

秋萩ニ玉ぬくみちの夕露とりや乱さて宿やるらん
萩の露玉ぬかんとけれど玉をぬよらん人はなかるみよ
宗祇法云枝なりしと宿としえ侍新しき旅の露
の宿かりしや又我君るすかり行ぐ人んの人の之
宿とハ亭の字を云亭ハ旅のすなりわれも
露見るれちらんとぞ云云これも亭前を取一
許なり

江邊曉萩

明がたの萩の末葉かのこる月の入江を出る舟人
明がたの時節入江の帝氾言語道断なる浅舟
人も何ともなかりし舟を出すや商人童利
逕別離とよふ白のんかり用前を詠ハし帝氾と
ハ何にもたのしみなく詞つゞき風情無類前とぞ
正云云曉月よ泊舟の出る入江の住京人の祈
なりと云　萩の穂とハ尺ゞべうれし　丈林集藻汐
草なりし萩の穂とこゑんはすれし　撰集ニ見エズ
荻藨薍葭也古蒹切荻藨也玉篇徒歷切萑也萑ハ細
葦也又白荻蘆荻葦穂とよむ萩を蹄りしあり江
にも無し撰集にし毛集にも萩荻蒿と次第く蒔

八本後切花葉布(シク)

山家初雁

秋風の雲にまじれる雁こゑぞやまの里に居るハ床に入り
風もうりたにもあらば雲路なく雑の雁といくつともと
なく翔て居る里中へまつり初まる也正右云やよ
伸しきば雁めづらしき詞つゞきなり

海上待月

沖渚しらぬ妹がきなむをかざしおきて出るを待し不知夜月(イサヨイ)
古今 業しも本も色かはれども大海(ワタツミ)の浪の花ぞ秋なかりけり
海竜(ワタツウミ)のかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路しま山
万葉 山の端にいさよふ月を出んと待つゝ居る夜ぞふけける
これも不知夜月ととめる之右三首を本哥と志て俵を

詞の続様よろしたり白妙に出るをうしとあるなれハ月の
海ぞ出ぬを待詞が殊に面白きなり月が出つらしは
却て(カヘツテ)憂し(ウシ)と之正右云海から出る月ハ浪をかざし出ば
といふんなり月村翁云佳景をかざしと志て月を
出るを忽(イフツ)べきにいざよふよしの色を出たるし
ところあり又出るを憂との本ハ佳景の絶妙を月に
恥て出るを憂しといさよふ意之不知夜(イサヨヒ)とハ十六夜の
月をいへり山の端を出ぬを云之望月(モチヅキ)とハ十五日の月
なりそれより遅て出るをいさよふ月といふなりいさ
よふとハやすらふと遅く出る義なり又源氏物語の
名句の巻にいさよふ月にゆくりなくあくがれと云詞ハ
八月十五夜の明方の月の山へ入つゐる絶もいさよふと

いへり日本紀に不意(ユクリナク)とよむハ人かくれの義なり
云有云 海上の名に浦ときこえり文字にもよそへたると海
乃字入たるなるへし

杜間夜月

袖ちかし色やかはらぬ松風にぬれてかわける月だにすめき

あひにあひて松ふれの行袖ハ宿る月さへぬれてかわかぬ

正居云 此哥の詞を用ひて月の影よ生れし松ハ色
よろつにかはることなき松を見きのとにて緑ハ
いへるなり 緑ハ六位なり 五位ハ朱四位ハ深紫 三位淡紫
宿位ハひきくしふかき松も袖にちかきとをしるなり
ぬれしハ涙をもちさるこ色なるハ緑なる我下宿
述懐の袖乃涙にぬるゝ白かる月と結ふれきく

なけとハ松を不変にしてちらぬ木の間をもりて
漏くる月の秋なりされとも風にて間と出来て
月乃影もりさかとかの(スコシ)影なるとさしくるれて
て松の間あらしまてるなり
源氏明石巻に月の光がくきくと見えの光も
せぬと云ゝ 夜の光せぬとハ残の中なるとき李白を
夢にみる杜子美か詩に落月在屋梁猶疑見顔
色 松月日かこち良しみえたるかくしたる詞也
詠きえへしかし

深山見月

花ゆへていくたひ信てこにかりし古山乃月を人やこふまし

古今
山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさん

此本哥の心てさためぬハりてもやさぬ之不愛也されとも月ハ
ゆきとまり也此文字ハ本哥に我ハもやさんといひし所花
なくして之花を月によせて作る詠歌大概に以四季
哥詠恋雑哥としるす法なり正吉云筆のすさみに
乃まてさんハ慰（サンサミ）之すさみしもてハ捨しものを風吹す
さむハ吹やむなり風すさみハ吹出る也雨ふりすさむ
ハ降止なり雨すさむハ降出る也

草露映月

むさし野は袖しも露やをかぬ白玉の草ハ見えけり月そこほるゝ
白玉ハ志らつゆの事之貫とめぬよりおこといへり見るゝ
らハ皆なかりしや露を玉にぬいて貫き留めぬとハ
露之志の種も月乃こほるゝといへり　異説かゝす不用

関路惜月

相坂はくたりこん日を数えても猶ゆく月の関のとなし
拾遺六に物へまかりける人の送り関山まで侍りて
別けるにハまた逢坂ハくたりこん日を数へ有まじれ　貫之
此哥ハ逢ていふ事に当て海とも逢ぬといへり
おしあけつるは惜しあかぬ月に関の戸あきて西にまかるか
此二首を本哥之初の哥をもつて二三句をいへり下の関
守ゝなきハ後の哥に端ゝぬる関の西り
見るにあまた関を守るとも月ハ留めてきらく宗祇
注云上句に逢坂と云名にはあまはりくたりこん日に
めくり逢へきなれとも先今夜の借寝にかくれふく
月を留めんと也

鹿聲夜友

山里の竹よりほかの友もなき麻の庭れ草哉し

東坡云松竹梅ハ三益友云々 又梅竹石を三益友と云 東坡贊文与可云 梅寒而秀竹瘦而壽石醜而文是為三益友云々 万宝詩山云 松竹志年ノ友 黒霜幾度經云々 君子ハ友竹 王子猷ハ竹を愛して此君と号す 排韻ニ云 王徽之字ハ子猷風流性嗜竹種竹曰可一日無此君邪云々 子猷ハ羲之が子之 又竹を君子に喩ける始ハ詩經曰瞻彼淇澳緑竹猗々有斐君子云々 淇水名 澳ハ隈也 猗ハ音ハ阿也 美盛皃 興也 斐ハ文貌とあり 又東坡寄題遠前抱節君云々 抱節君とは竹の名なりと 又親王の唐名を竹園と云也 玉葉集十六に新院御製

その世しそ経りけき一百年や竹の友とて久しき庭乃呉竹

千載賀部

いく千世とかきりさためる呉竹や君のよはひのためしなるらん

拾遺賀部

わか友と君かみかきの呉竹ハ千世に幾世の陰をそふらん

色かへぬ松と竹との末の世をいつれ久しと君のみそ見ん

君子の友とする竹りハあらで山里の友ハ麻とも山家かれとも庭に麻あるへし 朗詠下ニ 晩竹ニ序云 唐太子賓客白楽天愛為吾友云々 千五百番歌合 讃岐寄

我友と契し竹ハ言の葉にもれて人にしられにけり世のゝちの

新千載集ノ祝部 竹不改色 平貞時朝臣

万代に色ハかはらし此君とあふきハかきりなき呉竹

田家擣衣

露霜のおくてのさ田に風のすゞしく音に夜さむなり
晩田(オクテ)乃中外早稲(ワセ)なり　露霜の置に秋風吹ごと
もみぢせる音に夜さむくなりし風情を歌ふ所とぞ

古渡秋雨

ゆきゝにもたえぬ角田(スミ)川の夜あめハありやなしやと
中将の名所也友あるをかくは常にも問けんとや
名にしおはゞいざこと問ん都鳥わが思ふ人ハ有やなしやと

秋風宮野

宮城野の原のしら露もおりゐて松ひしも中に吹音は秋風
見るめ御笠と申せ宮城野の木の下露ハ雨にまされり
汁侍(ミサブラヒ)とハ殿上人を云宮城野とハ内裏を云　名所の
縫にあらずハ宮城野の付寄ハ陸奥国玉造郡　府中ヨリ三里

露とよめり木の下露ハ雨にまされりといへり　露をも吹おと
し扨中まず吹ゆふこなり底本に満の字あり

籬下聞虫

見られ萩ふ秋の夜の花の下露になきぬるもあり松むしの声
萩の花こぼるゝを帰り松虫の涙かと推量したるなり
正若云萩の花ハ秋にひかれて赤紫潤色あるとて只
よそほふなり

紅葉涵(ヒタル)水　涵ハ没(シヅム)也水沢(ヒタス)多也　写(ウツル)水　イ本

山川の時雨てゆけば紅葉ばに秋ぞまだ水としらぬ流ゝけり
落葉の流るゝ川を花とみて秋もまだ水に袖や濡さん
これも梅花乃水底ナりしもる歌をよめり猶々
それ秋冬の冷眼前なり

山中紅葉

山めくる時雨れたくのもみちハのいく千入とかこかれもらん
山めぐりめぐる時雨とくみえり 正吉云 めくる字ハ四方に
廻りて有山といふなり 山中といふ心也云々 又説
奥乃紅葉に山中ハ紫えなり云々 宗祇云 時雨の奥
めつらしきつゞきなり 山深ふあり 時雨れ奥とハ深き
時雨といふ心之 歌奥にハ深き事何まて之

露底槿花

秋風のくれまたさあめ白露にしをれてひらくあさかほの花
槿乃葉の上の露ハ秋風に吹れても花のうへをそ色消ぬ
移られても志のて涸となりひらくてハ露に花のひらき
されてあると之 正吉云 露底といふ所を思ふによめり

初冬時雨 冬十首

今日よりハけふこそ時雨れおとつれて神な月とハ人にしられめ
人にしれといふ意なりさこそいさめにてしるへ之 正吉云
此文字ハ今日既に冬なりとさこそハ押なりて御簾之さをそ
なといふに同し 宗長云 今日よりとハ今日といへども
いふ心之
冬来ぬとてすれハかくれなきあらいしを時雨のさきにさ
此所ハ文字むとて之もとも時雨しかりすれのかちて
冬之其角の字之徒来とハ此きさ時来るさ時なり
初冬ハ冬三ケ月乃初之四季のうちし万物有
三冬清きてまた来侍とよめり 又拾遺集に之を
夏と秋とにハ此詞なし

霜埋落葉

胡蝶の夢れ翔りしおのしきをのかなる夢のこゝろを
落葉乃上よ霜の念くおのきくまりしころをりて
又落葉の下乃夢れ守きくらしさをおのいかりて
忘れとくこの句ハ論語里仁篇云夫子之道忠恕
而矣忕忠を中心なり恕を如心なり中庸十三
章施諸己而不願亦勿施於人云々
論語顔淵篇孔子曰己所不欲勿施於人
法華経第二方便品ニ十如是を説り其中に報如
是ハ善悪の二支とのふ報ある意之如とハ十界一如
空諦なり是とハ十界ともに中道法性之云々惣の
字の心をよめる行に

月をはなれてあまりおもしきにれは月山のあれましへ今行らん

屋上聞霰

杉の屋よあられ音もどろんつ風のけはひにうきくむしゃを
謝ものゝ字にくく風の音しきて成りそれる霰
乃さしもむらくに我くらと杉屋ハ板葺也へよあ
ものきれもはとかり

古寺初雪

むらしるやかの小山姫の布さらし給ふりは今へ佐保姫那呂
古今集雑上読人しらす海ても湖のめにゝそになある　伴勢
たちぬきぬきさし人もなにのをなふ小山姫の布けるそん
伊勢集ニハ庵門にて他人の宅をとふてかるとあり
哉絶て緒さし人とは仙人をといふ山姫とハ山乃精

瀧なり山邪之瀧を詠るは瀑布と讀ませり盧
山瀑布といふ詩の題あり 大和乃龍門なりても伊勢
にあり 女人結戒乃地へ也て行し詠も哉絶えぬと
よみし哥は旅を音にて山の如くせしと云 女人不入乃
ちとの客落にて伊勢か詠へを定家の哥にて紀
明をなし也 寺 末代ハ聖賢乃法れもなくれならと
歎との作ぞなり初音なれとはれりてよし諸ましく
もと 昔をといふ昔え正存旅をとも忘れ守
よしなし 文華伊勢か哥よみし名寄の面白瀑布
をもち後に音か皆ろつてて見なしと初音なれ
ど山中よへ流く清こちしと有り
昔をや今し来まさ時々あをかに咲て来つ 忠岑

古今紀貫
いふ川して龍田姫とは山すめん古ちのもみちなるとて紀
此哥詠門寺小ここを読み也作者失念也
後撰十八雜に 龍門滝にて 中納言定頼
在俗のとき吉野山の瀧をみは水のあくるにて滝の絶たるかな
雇よもよ詠門はまりて滝乃かへふてかの國の守
義忠かもの花乃侍かりいて見るといひ侍りれ
ハよ絶る弁乳母
おいもく老ぬと桃の花世へてる滝の志るしと
千載集十六雜上 龍門にまいりて仏宝ありける
法を侍ける 能因法師
あしきつるのりてかく深宮なれと詠たへハ見えぬなり
日し龍つきのんをよめる 藤原清輔朝臣

仙人の着は詠をきそこれハむかしきゆくといふ谷々を
荒巻法下云定家の作意ハ古寺の初雪を賞して
むかしは瀑布と人の裁着を詠まし俳諧かいへバ
跡をさへきりとふ所く当寺の雪月なる景あれど
俳諧ハおのかよる所の詠を練らしせと古寺の作
をもとめてよめる也古今に俳諧の篭門よまするを
あり詞を結構とさハ女人結果の比よりいはぬ迄
代詠ハる乃歌乃比寺門の人ともに女人結果の比
をいひ立んとていふうれバ詠田姫をハし此定家
乃寺をより所よしてよめると見しされとも俗言
俗態の詞ハ最上之詞のあしきを俗言といひ姿
乃いやしきを俗態といふ

庭雪厭人

此庭ハふみこん人をまたれ新雪にこそよ庭をながめて
ゆきふれぬハ厭の字乃心定而白雪不足踏を詠む
まじと問ふ人を厭なり宗祇所云意乃ハ心
といへる妙なり我心に徒然をていふへきことを
余情うきりれし

古今 庭の雪に我跡つけて出つるをとはれなりと人やみるらん

海邊松雪

須磨の松やいつくとふり雪にたつねも志らぬ蜑のあま人
須磨の雪面白さも蜑鶴の月まハえ言
俳諧之正意云大雪に海人を不便とおもひ
てながむるとも志らぬとなり 異説不用

水郷寒芦

あしの葉も霜かれはてゝ見しま江の入江の月の影もさびしく
三島江云地名なり 何のさはりも月みゆる紀称なり

拾遺集 小人丸

三嶋江の玉江の芦をしめしより おのがとぞ思ふ未からねど
摂津国嶋上郡の名所なり同名肥前にもあり水郷寒
葦とハ芦よりハ草ノ枯(カレ)霜乃落たるをいふ葦(アシ)をば
よまざる也水郷とあらバ水辺の名所をよむべし

湖上千鳥

しがの海や月待浦の小夜千鳥いづくの湊をさして鳴らん
にほの海とハ湖を云月もおもしろく見えぬるなり
つまの鳴をもとむるハ鳴ならんとぞ　異説多不用　鵆 千トリ

寒夜水鳥

さえし夜は松をあらしのたえぬハ鴨乃青羽の霜ぞおくらむ
松の葉の霜をあらし吹はらふ其霜鴨乃羽の霜に
おきそふなど也 異本にハ霜夜千鳥とあれど誤なるべし
千鳥の歌に鴨をよみたる例なし 歌の次第ハ[illegible]
氷冬月千鳥水鳥霰初雪深雪とあり夫木集
廿一代集又百首和哥なと皆かくのごとし 堀川院
初の百首にハ冬の次第千鳥水鳥とあり其ほかハか
くのごとしや此百首も冬の次に千鳥水鳥あり扨
千鳥の歌にハ小夜衛 磯─浜─湊─友呼し─夜─夕
─夕波─通(カヨフ)─浦─川─村─なとよめり水鳥としてハ
歌にハ鴨鴛(ヲシ)浮(ウキ)寝鳥なとよめり 鴛鴨といふ也二種

をうしへてよむなり 但鴛の鴨ともよめり 又
夫木集廿七巻への雑の九に 鷗（カモメ）鳰（ニホ）鶚（ミサゴ）鴫を入られ
鴨など一字の鳥をば 是等ハ雑なれども冬の詞とか
て水鳥の題によめるあり 連歌にハ鴛を十月と
定めたる鴨と鴛とは三冬に通ひし用也 和
哥の題に鳥のまへに千鳥を題出すに初冬とする
也 十月に氷を小寒と等し 十一月の節を大
寒と等すれもなり

水鳥

鴨

続古今
芦鴨の拂もあへぬ霜の上にくだけてかゝる薄氷かな　式子内親王

新古今
水鳥の鴨の浮寝のうきながら浪の枕にいく夜ねぬらん

千載
難波潟入江をめぐる芦鴨の玉藻の床に浮寝すらしも　左京大夫顕輔

夫木
泉川瀬をかでて杣木の流よきみなかみを鴨のむら鳥　後花園院

堀川院御百首
夏（ナツ）箕（ミ）川入江の水に鴨ぞすむ麻や静かに山陰にして

川風の寒きゆふべは浮寝する鴨の青羽に霜やおくらん　崇徳院

鴛（ヲシ）

千載
この比の鴛の浮寝ぞあはれなるうは毛の霜よ下の氷よ　俊成

夫木
払ひあへぬうは毛の霜よいかにして鴛の青羽のかはしきるらん

右鴛鴦によそへよまれしもよめり 鴨には多くありと

芦辺より浮てたゞよふつまそひてゐる鴛の村鳥

岸ちかき芦屋の水に浮寝して羽がひにかはす鴛の鴨鳥

床の霜払ひかねては池水のまぎれぬさへそあらぬ霜

鷗（カモメ） 鳰（ニホ） 入

夫木七
谷川は汲みよどめる朝日さす岸のうきすに鷗（カモメ）むれゐる

新拾遺
鳰鳥の下の通ひぢ絶えぬらん荒れたる池の氷りにけり　定家

さゝら波菱の葉かくれ水鳥の鴨の浮寝や鳴てなくらん　貫之

鵁（クイ）

夫木
もゝ鵁よ浪の根（ネ）蓋（ヌナハ）ふこえに鵁（クイ）居るよ一声ありけり

同
淡路志ま松吹風のおとたてゝときけハ磯辺に焼沙（ヤキサタツ）もたつ

八雲云万葉にもさらによける秋沙とも川に居る
鳥とも有り

水鳥旅筏　雅秋
夫木
山川に又筏や出づらん先立さりて阿知（アチ）のむら鳥

夫木
夕されハ志か津の池の氷して投られぬ方阿知のむらとり

堀川次郎百首
鳴海潟沖よむれわたる味村（アチムラ）のさわぐ羽風のさむくなるかな

以上十九首ハ水鳥の歌乃前に鳴（ナル）海（ミ）を尾張なり万葉
第三乃長歌に味村（アヂムラ）左（サ）和（ハ）伎（キ）とうきり百十七首ハ沙（サハ）
へ鳥る味村騒（カハキ）とあり又渚（ナギサ）ハあぢむら騒（サハキ）とあり
又朝なよ田霧ハんでありて夕きりに蛙ハ騒とやいふ
藻汐集に云山の端に阿知（アチ）村（ムラ）騒（コヽ）は去るなれども

ことハ誤之云と騒馬の字ハさいくと万葉によむ剣あり綫
志ハしハして字ゐるをよ詞と誤りてよみ是その誤を経
して云明音のさハしきを詞の是ある也たとへはさぞ云と
ゐとそら又ハ友の騒（ゾヅク）よみてさむるんもあらん我ぞかりき
さよ字ハ武士（モノノフ）なり藤人とも藤旅とも云同じかり
騒（ゾメキ）もさりくた同じかるべし

巌谷澗（タニ）氷（コホリ）

只谷氷ト云題モアリ

今いくかおかな浪乃ちりもし谷の氷乃志ぐれりまつくる
古今
谷風よとくる氷の隙ごとによおかなきやまのうつ花
此歌ハ春風よハ氷もとけし焼風はハ解るを云ふ文字よ
巌谷の字あるハたり沢しもよさかんと去るよなりけれ
氷の解るを待らん時も待といふ心あり花をといへるも宗

業平なれど今夢日あらそて氷のとき泣男泪の花と
みえしなり

初尋縁恋 恋 二十首

なのむあまりの里人におもく無目し思ふ名れ松はこゆやと
これは古きへ見る云みと文字よ目し其度もおのむあまり
なり其里人とかいわもふ人の方れ人かり何と聞んな
きは目し所の思乃まつるれど定くせむ方よりは人
ゆかしく聞んとて其時中し人かわと答うしば古今
に古今の恋乃一

夕附日さすや岩ねの松ぬをいつわぬ恋のすゑ　古今和歌集不入
きゝのかくいりかのむてあかと待くて結ばれそ　異説不用

聞聲忍恋

秋の露ふうつろふ花の名かけて虫乃啼声かしそれ
事よそうつろふもは菊之花を華とそありいへは口れ中

遠くとも菊のなきくきくハ音菊などいふときハ聞(キク)乃
字と口の中通(カヨフ)ふよしへ耳よりおもふ人の聲近く
しつる伝人もあやしめ世まで虫の鳴声を耳と
きそてゆかしきへ人の声をハ聞どもたいもめぐあり
虫のねハ不便のもとゝ

及フ二親昵(チヂツ)一意

昵 親近也(シタシ チカツク) 昵 目小視也(アヘリミル)

めでたきゆかりあるをハあハれし紫のいろに近き人の草紫なりし

紫の一もとゆゑにむさし野の草ハみながらあはれとぞみる　古今十七雑上

此哥は妻のおとうとをもちて侍りける人に袍(ウヘノキヌ)をおくるとて
よみてやりける　業平朝臣

紫の色こき時ハめもはるに野なる草木(ユカリノ心)ぞわかれざりける

伊勢物語乃四十一段の意ハ草木の萌出る初ハ皆紫色
なりそのごとく妻乃妹の男をわきてハおもひもぬるや
此文字ハ本此月のあるをと思ふよせまりえらしとハ必
乃字のかハる之意を女に比もてたのふ人をいふ色に比たれ
寵愛の時を云 一説云 萌出る意とは久て泌しき
とは釈昵(キツ)のむつましき中といふ人よつんてまいとも付意の
色に比草木のごとく神居ふといふハえんえんまりきてなり
又紀貫之が土佐日記に松原目もはる〴〵(ハルバル)とあはるハ杳(ハルカ)
といふ義なり

祈不答(アワ)意

ゆきつへ事を祈し志ゝ好ハ天神何か利生あハ数度さりつ
伊勢物語云 陰陽師かんなぎよびて恋せじといふ祓
乃具してなむ行(イキ)ける祓けるまゝにいとゞ悲しきこと

と数満きりてありけるに意ありくのゝ岩くなれは
云ゝ葉字とはかりて是は無派を清祓して於主
ともに志新しかれとも文字は北邊なりト白は伊勢
恭陀の詞をこゝにまて通用へり祓除に三ツあり穢悪
を祓と百祓を於うと災を祓と之兇の新まて
には於とあしとかゝやに於るとよむは一夜於た
ふ等まてん滌し不用く

諸宿直意

立田山木のまわ下乃かり枕かりほあくまにけぬこゝぬれて
大和物語に大和ノ国守の娘をある男盗みて出て
竜田山にて日暮れて女乃寄る馬の障泥をとも

昔し男の前に

古今十八 此うみちは本郷付るり唐衣立田山をおりくへて行く　読人不知

女乃返事に

立田山岩根をふけしてもまのゆく居しゝぬつかとも我れく
とひて女いつくよ知りまりけれ本説して立田山
本代をの下とゝあり袖中抄云世のさいがしきこと
四境乃祭とて公のせさせたまふ鎮に木綿をかけて
四方の関にまつらる平城京にては摂津国への
よふにて立田は西の方の関の故に木綿付鳥を
よめりと云ゝ又義木綿付たる鶏を竜田須康
逢坂乃四関へ放ちし事あり續拾遺に立田山
本業吹しくとよあり

蕭厭暁忘

こよひしもかの山にやどれる暁ぞとめぬと

若紫巻に藤壺入申給しは源氏君の継母なり

源氏密通あり詞に云かの山に庵むすびける夜

かりけれどあやにくなる短夜にて

みても又逢夜稀なる夢の中にやがてまぎるゝ我身ともがな

源氏詠之 藤壺の御返

世がたりに人やつたへんたぐひなく憂身をさめぬ夢になしても

かなしめもしたる藤君はなげかんと之世にはなれなば

へだてゆくをまうち暁そゝ山をうくるに月には清

てよむさくらかたに月ればうすくよむ

墨染のころものすそわる人はたどるしゞのみちあるとてよむ

丈木集 すは白雲の色ならず嵯峨の山さくらとよめ

難波江の藻にうつもるゝ玉かしはあらはれてだに人をこひばや

西行云 此哥乃ゞくはしはふんなり

帰去来書忘

朝霧には皆かくし袖もかしもかり山あらそひたる人もなし

上句は伊勢物語業平の歌を本歌とす

古今 秋の野に笹分し朝の袖よりもあはでこし夜ぞひぢまさりける

下句は六条の歌に

古今 春やこし秋やゆきけんおぼつかな夢か現かねてかさめてか

業平女業平 かきくらす心の闇にまよひにき夢うつゝとは世人さだめよ

業平へは夢をうつゝと読ずるより後朝の歌あらしふ

今ノ宮家へは夢ぢうつゝもとあひ人はなれとし宗祇抄

云無元ハ房とも咲とも書て比は胡の艶書
て名しるさるも同人なりとも消息とは胡の文
なと消息と記しくいひてる同人もなしとハ艶書の字之

遇不逢恋

ら傍人いなる中の契りて一度のつめとあはれのけ
契よ二候あり其よ再ひ一よハ逢てものちとけ後を
不逢よ同しと一ていはや一夜ハ逢て云ふ又も
あいざると世宗碩云遇て後よ又も不逢ゆへ也
もみ人をさして外人と云もや余所よなる人なしハ
中ゝ逢ともさあはて原題よ云てつきと文字
むかしの恋もふつくいはるなる逢ていて誨らくなり
は今宵も晴乃次ハ逢ハは出らるとそのてくる也

も実よ只翁貌たり故ら傍人と云也し逢なきハ侍
名らんぞうと云古云これも地方と粉骨をはく
しは前より新古今に出るし
我恋も雲持明日の深くみて古宮が泉に流さんと
これも明日ゞ松よまくはくほゞきすり名のきすき
夢よさりしと此の句ハ雖色もかくる物ハ版の年とあり
遇不逢恋の前に
歎きやあふぬ別よ哀をさし暁ぞりかくてみるれとも
暁ぞり憂物ハ形しの前れ待之あつきかりけ傍るれと
も契るさりしと
恨侘まさし今ハの身なれとも思ひ出れりし夕暮の空
人とも我とも恨るとさすが忘られの空とハ叔

いつまでも見まじき光ありかれざるといひさしてよくなく
今はたゞ当座のきゝ所いよ

発経年意

秋かけてふりしく木の葉はいくかへりむかしき春の色をみるらん
秋かけていひかけしもあまりしく木の葉降しくは千入を住
これは発の意なる句と下句によりある所は江の木葉
ところはし流くたるとあさ紀縁によせて塚の字と
えんよするも丹波路とも武苑とも よりあり紫なり林
かきては秋にかゝりて正吉云秋の初を云春かきても旧
し羚田の字之羚田も是は之経年の偏之春に落かて
秋はふりしくそのいくかへりなり光とは不過意之語也
木の葉ふりしく秋も哉　句体発句

懸言偏意

老の後も世の許ぞいつあんたのまれぬへき筆の語の那
偏と思ふあかりし今又よそか後ても又をりまにより世
此方偏文の偏云秋ます人と云ひはじめて去人を
けり空ては誰をか頼み為のまんと之たゞ後と云人
ありたと世ふ之たる衰之云と上句よ言偏の字
らんとは懸の字之意とかりる又まれは実候さる
ぶるとされども世の中此許まで教をききれきによ
てらるゝなり

反事増意

打つむく檀[illegible]
源氏物語柏木巻に源氏君此本書女三宮へ柏木の

衛門督の密通の後に柏木の哥に
今ハとてもえん煙もむすほゝれ絶ぬおもひの猶や残らん
とあれハ女三宮の返し哥に
立そひて消やしなまし憂ことをおもひみたるゝ煙くらへに
此五文字ハ柏木の哥に猶や残らんとあるにこたへて
なり 西音云 煙くらへとハ死んをもいつともかはらんと
しんへより思ひと恋とを火によせたる哥なるへし
今朝よりハいとゞ思ひをたきましてなけきこりつむ逢坂の山
是ハ見しよりもまさる恋を今ハおもひつきまとひなし
思ひの煙恋のほふりたる常の事也 云〻 煙くらへ禁忌
乃詞也 八十四代順徳院 後鳥羽院第三御子 御代に内裏にて百首
在の人乃我京兆柳の元和てありれなりし乃煙くらへ庭に

とよめり 後八十二代後鳥羽院叡覧ありて勅勘あり
き勅許いまた陳(チン)り着(ツキ)て後によく〳〵勅勘ハ忌詞とす
されしとぞ 師云 女三宮の返哥を衛門督見てくらへ強
返事に増る恋なるらんと也 煙くらべとハ女三宮の返哥
乃詞なれとも哥の返事の字を含めり 煙(ケブ)波さるらは
柏木の人之哥乃坊の字をきらふ

被厭(ハ)賤(ゝ)恋

なよおていひれ志たりて桜戸のあきなかりける表の様と
桜戸とかきたるのあるかくり九葉とし万葉人丸哥に
足引の山さくら戸をあけおきて我待君を誰かとゞむる
源氏物語乙女巻に夕霧と雲井の雁との義によりて
雲井雁の乳母か夕霧を目て月毎とも抄乃初の

六位宿世(スクセ)よとはなやくしとありこれをさして夕霧か
緑乃浅き袖の色を浅みとりとやいひ志たりしき
袍(ハウ)の色六位ハ緑(ミドリ)五位赤(アケ)四位蘇黒三位ハ深黒なり
天子関白なとは緋色とて紅粉深之雲井雁の父
致事(チジ)大臣乃孫(オヤシ)言して夕霧に急こそすらしき
とも致仕大臣の母大宮のはぐくみ一所にて生育
まて幼より睦ありめし故に其甚あはれなり今宮
家の前桜戸ハあきといふ茂出たる詞之桜乃
色ハ朱なり又戸ハあけあれはなれる也袖中抄三云
桜色ときぬを云云 こしひ志かりとしいひくるよ
乃詞之乳母の詞をうち流してよめる所也

桐壺帝
— 源氏君（二男 母村壺更衣）— 夕霧左大臣（母葵上也 源氏嫡男）
— 二宮（摂政北方 号大宮）
 — 致仕太政大臣（帚木ニ頭中将 摂政殿一男）— 雲井雁（母ハ按察(アセチ)使大納言ノ今ノ北方也 初ハ頭中将ノ思人ニテ雲井ノ雁ヲウメリ 夕霧大臣ノ室也 雲井ノ雁ト夕霧トハイトコ也 共ニウバノ大宮ノモトニテ成長セリ 夕霧元服シテ四位ナルベキヲ父ノハカラヒトシテ六位ニシテ儒学ヲサセラレタリ 故緑ノ袖トイフ）
 — 葵上（源氏君北方 夕霧ヲウミテウセ玉フ）

途中契恋

石のへは井出の下帯ひきむすびわかれもつらし 初草の詞也
大和物語に内舎人(ウドネリ)なりし人大神(オホワ)の幣(ミテグラ)の使にて大和国
よりくる井手の里にて六七ばかりなる女童のおかしげ

なる縁にて努を男しのぶなりまてよ逢見へたくみて
故むかし頼にまいりこんといひし常とことにこたへ
さて其の言ける常をまちわたりてゐる男八年
ごのころにてまゐり志たり七八年までにて同じ役にはなれて
ふる井手のほとりに居りてこれをみたる女のもの云
ゆかしさもちも縁ぬと書く一口いひて末をいひ
さしけり　云こ大和とは三輪の神なり井手の下帯を
結の蔓しける故にて初草もいふ草も女に比して云
已に見えし井手の下帯ゆめとも逢瀬の縁しき玉川の水（後撰）
此哥は文にて逢てのちにこそ出るあるべし　大和物語には
なし藻汐草云末帯にはうへ書て帯をときける
故より下の帯とぞ書

従門帰恋

君に逢はむとおもひ北門の方より来て人に待たされ家にかへりて
葎ハ草部に入たり　葎の軒端も八重とぢて葎茂
門とも言ひ　さしこもりしとはされがたしといふにこそや
哥ハ明らかなり

忘住所恋

いかさんその名し里を住の江乃岸に生ふといふ草ぞ忘れて
古今墨滅　志ハ住吉の岸に生ふといふ恋忘れ草（忘ノ字ヲ云）（忘之）
そのかし里ハ君ふ人の住所を忘れ草にて萱草之藻汐
草云大和物語には忘草君を草に同物といへり　俗忍ハ
細長にて星あり種に出づと哥にあり又忍乃
一名を事忘れ草といふ故に忍恋と云字をひ草

よ書て笘簾なとも冠らも侍るよし伊吾の苫とよむハ
萱草之萱草を忘憂草と云古今雑乃上ふ相忘れ
つゝむ人の伊吾よ譲りふよみて侍りし乃
伊吾と海人を苫とも苫とも相忘る人忘草ともいふ之

仮意祈男

なうしよあらはあふせをも向て年のをとれる歳乃玉の緒
いふりして忘れん命にあらハ無世の有ことしせハ
常ハ無年らにと祈りよこれを存命ハ無てとあらんと
も命をとれる注連縄ハ長うまていもせ縁の祝なり
年ノ緒ハ只年と云義之方塔ふハ心清別し懲しなて
あり

陽ニ壷ヲ酒ッ意

こゝの海やいくうらうらの汐のあらくもかき中の西坂
ふ文字大海と云之塩汐と云ひてまとと書くと
こ文字をつくよもべし云にみ浦にに塩汐の字を
あらくすれきたらくハ外の字のあらはすれうハ汐之
塩ハあらかしして塩汐をへそらハ之辺にハあらむし
てもなくさ海んよ香陽さるゝ之方なふの前よ
汐をそハ入船碇の落るれやあらくすれく憂のくしぬれ
此哥も字まは数石た
むめさけハ柳ハ磯乃草ぬふう神

借人名ッ意

仮初メ乃ほうきをかくれてかんハ我男のうハ能ぬ人りを
暁ニテ目ゐる荒礒よ出る神ゐる篠の忍ぶハ苔よ取ハ去るも

難面てける者のこと又立嬉しく浦よこそ有もすみ也り
月村府云我方丸深(カタ)ハ採列名所之海為之云々仮初乃
名所に靡(ナヒク)ハこゝ山しき之我方へハ名ひかぬ此人ニ後ぬ
あまひのりふり之我か思ふ人の様よあらひさるもの
名を備く名所て閨(ネヤ)乃戸をあきさらむへきのこと

絶不知(テツラ)恋

あふひ草人のかざしにさはかりも名をうたかはて三ふさいはし
源氏物語葵巻ニ紫上と源氏君と同車ありて
賀茂乃祭見ニ出ふ日源内侍といふ老女の前に
さるれしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしたる心を得る
此哥の二句め人とハ紫上を指之源氏乃源内侍か返
まりんと今日を許しにさいなくて紫上と同車となり
今日と待る日は今日祭の始りとこそ期し侍る
とあり公事根元ニ曰ク神乃告ありて今日祭る人々
葵と桂とを蘰(カツラ)としてかざしこれをもちゐる云
云々二の句人乃かざしとハ我をとハ源内侍か事
同人なしと也葵と逢の字ニよせてなり

互ニ恨絶(タル)恋

みるめ草あまた見えさひもかきくこえぬ里のしるべ乃なくぞよ
古今十四 あまの住里のしるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん 小町
此哥浦見を恨によせて藻汐草かくといふ
又より文のことを用ゆ三の句なき頃ぬハそういふ
うらみて文を書ふるとこ里のしるべとハ浦見と
恨とをかけて人とは互の字を云なり当れたりんとるを

をいひそかり

暁更霰覧　雑二十首

あけやゐぬるの声ふかゝるあかつきに驚きぬる世をわたりて
鳥の音ハ拍源ありしも暁より月をさそ御しるかり
正吾云暁の月をさし御代の故事など物ゆし侍
つるとぞ云人之又年あり朝謁ニ禁中一都良香乃
句ニ雞人暁唱聲驚ニ明王之眠一云こ漏刻の官人
ぞ暁鶏の声をそめるをさとして高く答られてけれバ了
后起て君と讀へ次に帝を起し卯時に出御成
て百官乃出仕をなく万機の政を聞召るなり
暁ちれさて詔刻めに油をし初より女房をふきまで
て其の内まて霰所守ハ王政に携とて百官と
亦婦人暁起て支を整く卯刻より前に出仕をなさ

まり之宵の人ハ色好よ夜の気有り寝覚して着
乃宮せしを待居ぬまし

薄暮松風

うへなきし我ねやの庭の松ゆふ屛は風の音さびしき
薄とハ漸く暮るゝ時なり江吉云夕風の冷(スサマ)
しきを云く其用乃松をも近く植置しを後悔する
なりといふ夕ハの字又字に力(チカラ)ありその時ハさびしさ
まさる我ヵ種(タネ)ならし悔とあり下乃人は世の人心
をさなくして後の災を顧(カヘリミ)ざるに比せ

雨中緑竹

色も又ねよ紫の竹のうれしくも君を忘るゝ雨のあはれ世中
宗頼云此文字有の故さ草木ヨは斯しのもあり我
君ハ思ふにかけても色のなき紫乃竹
に比してあり作者の説ニてハ天(ソラ)乃雨をうけて寝
られぬの我之江吉云君を思ふ涙ハ静よふる雨の中
ナリハ我身ことも思ひかへし也作者の心同し
堀川院御前百首よハ春雨の色を後頼
きしくも見へぬ数ちぬ君を忘る雨よなやましき
竜濯宮之人を経よより夜の色あはれ竹の色
紫の色かはらぬごとく我身よ経乃あり孫ハ哀世中の
君と親しき又養朗詠下竜雲賦云竹班湘浦(ニ)雲凝
皷瑟之跡(ニ)云湘色班竹の茂て見ん中ハ雲乃竹残
しるり瀬て二女の跡を残す欤との句詠の竹乃詩
注云帝堯有二女長曰娥皇次曰女英共善鼓瑟

堯以二女妻帝舜〻令見內舜心弥謹不失夫婦之
礼舜崩二女哀哭其涙染竹二女死葬湘水後人立
廟祭之云〻　今の世乃紫竹は二女の泪の湘浦の竹
にうつして色かはりし跡と五文字を畢のぬしにて
涙の跡も常盤なり竹も色かはりぬからは世
の理を観してあはれ世の中と也　此時ハ春なりけ
而も涙のかゝあり　異説多不用

浪洗石苔

早瀬川岩うつ浪の声たえす苔乃みとりは色を新たに
白波にうちあらはれても苔は緑の色をそふして浪に
消されぬを褒るより正吉云地方之

高山待月

ひえの山にてよみ侍りし折ふしよにいりてころもきよくも月を待ける
比叡山を四明山とも云叡山ハ天台智者大師乃餘
流なりといへとも天台第十七祖の法智尊者智禮
法師ハ四明の令氏か子にして天台の教えを通達
の人なり故に日本よりも寂照をつかはして恵心僧
都の問目二十七ヶ条をも尋しかはさきより別して
四明乃號ありし故に叡山をも其のつゝき四明と
もいふ　正吉云光源卷に　惟光か母の家を源氏の
問ふに入玉ひて便て今うちん阿弥陀佛の光も心苦よ
く詠し侍へきとこそ云〻　此詞を用なり

山中滝水

白妙のきあらはれ山はつまれて昔の〻唐の滝の声すむ

伊勢物語に布引滝を云詞にたかさ二十丈広
さ五丈ばかりなる石の面しらぎぬに岩を包めら
らんやうになんありけると云流れてに笠乃中
の字あり音のことは声かかる之 ぬき尺くる人
こそあるらん白玉の

河水流清し

秋の夜の清き河の夕日新木抄ふもくらすらめいかりは
清きハくの清き許なしと云乃清きと流れてきより
家頼云くすり中らは一葉も浮と云前句之

春秋野遊

おれし野の庭も常もみるれぬ初子の小松雲もしの道
正右云初子の雲をとりて正月之始子ハ二月花

乃はまでをよむ之六百番に番くえさり秋乃野
遊を撰ひとて後徳大寺殿上人出くあそびたまふ之
年中行事にえらびたり

関路行客

ゆく人乃かくろんもあらじとく吹風はいとひて関の山風
正右云関とハいふ名を付て云ハ相坂之宮家などに
関守をそよといふ人ハ出かく有明の月の小夜の中山
此前上の関といふは相坂関之坂東乃名所なり
旅行し人ハ都を出でして我一人小夜の中山まで
下りよまで月に向てありあんなり夜の字乃用
なり時を小夜の中山とよむさまハさやの中山と
よむく同所なり歌陪乃前に

旅人の菓れ椛よそく左刀の小萩れ仲山今日の跡なん
容の字を文選ニ旅と訓ぜ 訓ニ賓客之容ニかくえ
文粲ハ懐乃字之遊仙窟ニハ記念の字之古今ハ
餞別ナリ 歌ニ有よみ人不知の前に
あかずして別るゝ袖の白玉を君が形見と包てぞゆく
これを出ヒして香を懐といへり 勧君更尽一盃
酒西出陽関無故人との詩を異国ニハ三ゞび謡て
旅客ニ酒を進むるを陽関三畳の曲と号し日
本にて相坂乃関送りのいゝなり

山家夕嵐

萱かや信方の草庵山がつのあたりや紫の袖垣
吹からに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらん

此句草木のしをれて山風ニて嵐の字を志らせ
より紫の袖垣ひさく垣なり山家乃袖なり

山家人稀

たれをまつ人やこふらんけても とはれぬ谷乃戸
山の奥へ庵をむすびし元の故郷を忍び忘れぬ人の
捨を谷乃道ニまちて音信を待とも それも
問ぬとも物いはぬ それも古云志のふ家とは
堪忍なり故郷を忍ばしくおもふんをい源さしと
整ひをして堪忍の情き人が此積とは源した
ふみとなり

海路眺望　眺ハ望之意也の住と眺也

志らぬめやさふ舟の浪間より小鳩のわたるのん

上句は源氏須磨巻より源氏君須磨の旅居
のころに筑前国大宰帥(ソツ)が娘に五節といふあり
父大弐任国にありてくだりしが今任はてゝ上洛せる
に五節も父に具して筑前より帰るとて須磨
浦の沖をとほるとて
琴の音にひきとめらるゝ綱手縄たゆたふ心君しるらめや　五節
源氏君の琴の音を舟に聞て此文字に認めて万葉
に猶豫(タユタ)とかきたるもの思ひ定まらぬなり志るらめ
やは知りし由ふ思ふ心を源氏の反哥に
心ありてひきての綱のたゆたはゞうちすぎましや須磨の浦浪
心ありしは五節に留まる様に此二首をいさゝか取り大
弐なれども帥(ソツ)と云より帥は親王のなり玉ふ官なる故
に帥を宛て史督とす又帥なれば大弐が
帥の代官なる故に帥も大弐もさつて下句は備
前国の名所の児島をよせたる拾遺集詞に
源為よりが大弐にて小島の浜に綱ひきしなりぬ君にあはすも
此哥の下句をとりて源氏君にあふよしなしみれ人をしきをといひ
も見とて小島のゆきの心といへり此吉云五節が奉
る心とは誰人の志なまいとに云と志ゐまいが知りて
ほしあるぬなり舟の波まに見ゆの浪乃寄せあくがれ
乃心を知らく今波まに舟の声よふきと

月羈中友

夕隣荻宿りかし新シ友のは有明乃友となれる鳥
七月以上をと夕月萩といふ羈とは善き旅のんなり

夕月の比よりくらきまて友としける菊之月を催

ちぎりし友とたのまれし後にはわすれにし友乃やうになり也

これハ羈旅の前之後拾遺集乃 離別に神祇釈

教述懐 懐旧なとゝと入るゝ事もこの例なるへし

旅宿聴雨

旅にあるもぬるや玉の緒よわき身ハ袖にみてられぬ夜も旅ハ

涙の玉を袖に貫(ツラヌク)之西吉云濃(コマヤカナル)州之濡袖といふを

内をよふ夜のふかきもこのびそる日てこもりたれは

旧の一句便事をハ碎くるといふ之前の心を旅宿

の雨の悲しきを云ゝと

故郷有母秋風涙 旅館無人暮雨魂 楽天

海邊曉雲

明けぬとて消えし出る友西北星の消ぎれて雲にかゝる

雲ぞ別るゝハ東(ヨコ)引布之西南星を見て夜のあけを

何時とも知て西残出て物たり明方の星ハ見えて後と

と横雲にてあるなと知て西を出る之事かゝる物

さびあはれふかし正吉云星の消ぎれハ宵と暁とに

あり宵にハ次第に多く成て前乃月の星消さん

ぞなり明方ハ一つゝ消て失ぬ故に消さるゝなり

寄菱無常

はかなしやかれたる菱の中にうかびし秋と見えぬ歌で

撰集にハ無常を離の中に入てあり離といふハ万事

にはなれたり連歌にハ無常と懐旧とハ述懐乃

因果用之

伊勢物語
寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめはいやはかなにもなりまさる哉
上句ハはかなき夢なり下ハ此世作之ハ一生涯ハ夢也
一睡まどろむといふは大夢ハ寐ることにて我独世をまどろむ
より覚めぬ歎とハ無常の字あらはなり　唯識論云
未得真覚恒処夢中故仏説為生死長夜云々
この文のこゝろなり
悟りても悟らぬ時のさとりのまよひハ夢のさとりの　一遍上人
世となりゆく事ハ皆夢なり死ぬ生の空事ぞ
なりぬと真の覚とぞいへる世間大夢の中にまさ
ともに真にさとりにあらんとよめり

寄草述懐

ひろひ捨るたぐひもしられかきつめしおもへる跡の葉の折ふしぞ

新古今十九巻　神祇部ニ俊成
春日野のおどろの道の埋水すゑだに神のしるしあらハせ
おどろの文字ハ俊成の藤原の姓をいふ之公卿の唐名を棘路といふ之西吾云　俊成卿春日五社の法楽にかくのごとく家の衰を述懐して末の世までに埋水のごとくなりゆくをあはれとおもひて感慮ありて後成の知行の不浄きありしと云て異本ニハ棘の下の埋水とあり悪しき心の埋木とハ歌道と水道とを思ふより此文字ハ書あらはに拾捨るなり又俊成の家より当て例といふはきつあつめしハかき集めしのミの折ふしとハ定家卿の中納言にて大納言にも昇進なき残述懐の心也棘ハたえぬる藤の葉波の藤次草の

草部に荊あり又棘の路とよむハ公卿の位とあり又
藤原家の木に非ず荊と棘と八百字すり異説多不用
傳後撰九神祇の前に小野の皇太后宮大夫俊成昔
述懐前に書日北乃ところの道の垣すしとよみて侍
りしを前中納言定家もかくさかりに参議に任ぜられて
侍し頃かの家を召出て院中に侍りけるとて前太政大臣
いはしへの野とろの路すのと残るこそ聊の名もしとは

寄木述懐

九重の外面の標は見てるれよ六十の友ハくちてやみぬと
外面ハ兵つかさを衛門左衛門府右衛門府左兵衛
右兵衛これなり左衛ハちかきまもりとよむ衛門の内
をる護す左近衛府右近衛府とありよ大将中将少将

将監将曹あり是宿直宿なり外衛と宿直とは兵
別なり御ぎんしきの近衛をよ次は前名ハ数
に見え

ふきれがと何とか九重れちり江海の者の兵の数と

夫木集夏部アリ
藤原家隆入
衛垣のの外衛よそる標葉下蕨宿りしてそらぞ立友
右手橋左とのさうれもく外衛は標あり標ハ派
良材ニ云ニ自身を治して早下の家なり六千御て宿
たる者を標つまれなると

逐日懐旧

天戸のあけ日毎りゆふとて志りぬむりしハ立しかへらじ
天戸とハ大空なりあけ乃枕詞よ云すり日毎と

ハ毎日といふなり又第一天地の始をたづね君なまと
と神代乃始をたづぬむかしなれど云つたへきたるや

社頭祝言

祝言より祝しさきハ祝ふの君あきらかに長やかくこれ
祝の下にも祝文君が代の久しきなどよみあり雑部に祝
ともいふ心あり毛詩六義に頌ハ誦之容や
頌ハ美ニ盛徳之形容ヲ以其成功ヲ告ニ神明ニ此意之六義
乃中にハ頌の哥之佛神にも道理にかなふよし
事を祝ふハ感應あり此道の祝ハ不叶や

正吉抄云此百首ハ左大臣基家卿乃御よみより花族に
よまれさりし文字題にて祝ふ所ハ出来し題をさ
にも撰てよると若家卿のひ所之但百首にハ悉く秀
逸をハよみぬものなれ地哥を交ゆる也之殊に意の哥ハ
難題にハ源氏にかゝりてよみぬる御之源氏を引所有
三あり詞をとり又源氏の名をも付りして源氏とは
見えたるもハ上手の君かきなり冬部枯野題ノ下ニ見六百番の哥合に源氏
見ざらん哥よみハ遺恨の事也と俊成乃判の詞有
かたり三十一字に理をはよくいひさるハ下品なり一首
に理をあらはしたる哥のやうにもむハ上品なりとさあ
あるといふことを不詳俊成卿
故に言ひたるもの月をこ惜みれ我も様山をたちいでかん

其之前に、

我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて

宇治巻云松風をきくもまた姨捨山の月をみ

のありて中務乃心をたてまつる萬句にも不言古今に

とりてもさりかくの如き事多し如斯に六乃句法あ

り親句疎句親句對句疊句隔句なり疊句とハ重句

乃ことなり

忠通（御堂関白五世也／法性寺関白）
├ 兼實（大政大臣　後法性寺入道／九條殿　月輪関白）
│　└ 良經（二男／後京極摂政）
│　　　└ 基家（日輪十云／内大臣正二位／号鶴殿）
└ 慈鎮

右百首周桂抄ハ三條西殿逍遥院入道堯空よ

りの相傳也柴屋（サイヲク）宗長抄月村斎宗碩抄兼載

抄ハ自然斎宗祇よりの傳受なり木戸正吉抄

以上五部一覧して其中是よ似之説なり異説

又無用の古語古哥なとは多をハ除之任師説而

相傳之正統誌之畢

于時元和五年孟夏

洛陽黄臺山住侶祐秋叨臨叟書之

聖和學園 短大
第6639號
受入
昭36.3.14